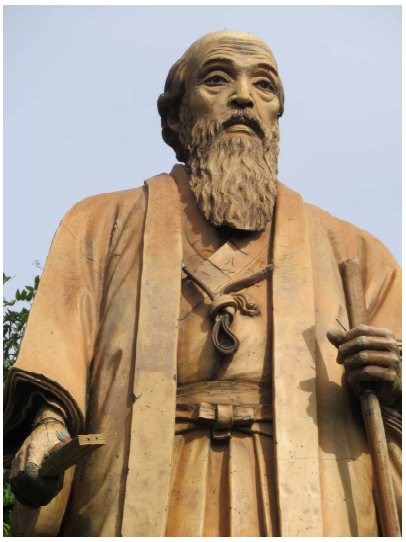
鯉江方寿（こいえほうじゅ）

鉄道敷設と水道に真焼土管
－常滑窯業近代化の礎を築く－



鯉江方寿（1821 ～ 1901）
写真：天野卓哉

鯉江方寿（通称名は伊三郎）は土管をはじめとする常滑の近代窯業の技術や工芸・意匠の基礎を築いたことで知られる。方寿は1821（文政4）年に尾張国知多郡常滑村（現在の愛知県常滑市）に生まれた。生家の鯉江家は窯業を家業とする素封家であり、方寿が経営した窯は御用窯として尾張藩との関わりも深く、「御小納戸御用」の高札を掲げていたという。窯業だけでなく、天保年間からは新田開発も手がけた。この新田は「鯉江新開」と呼ばれ、現在では鯉江本町や新開町として常滑市の中心部を形成している。

■連房式登窯による土管の製造法の確立

鯉江方寿の窯業技術への取り組みについては大きく二つあり、その一つは父親の方救から手がけていた瀬戸の技術を応用した「連房式登窯」による堅質な焼成（真焼（まやけ））の実現が挙げられる。その時期は大きく天保年間とされ、それまでの常滑においては鉄砲窯と呼ばれる大窯による焼成が主流であり、十分な堅質さが得られなかった。もう一つは、明治に入ってからの鉄道敷設や上下水道といったインフラ整備に呼応した真焼にして木型を用いた土管の製造であり、広く「真焼土管（まやけどかん）」「常滑陶管」と呼ばれる出発点となった。

連房式登窯「陶栄窯」の煙突　　写真：天野卓哉

工芸・意匠での取り組みも大きく二つ挙げられる。一つは1878（明治11）年の清国文人の金士恒の招聘を契機とする朱泥焼の誕生であった。当時は文人趣味の煎茶が流行したため、後に常滑の名産品となる急須の需要が高まっていった。この金士恒が方寿の窯を「金島山窯」と名付けた。もう一つは、1883（明治16）年、この金島山窯に美術研究所を開設したことであり、陶彫などの技術向上などを図った。方寿は1901（明治34）年に79歳で没したが、方寿の顕彰については没後10年余にして高さ2.6メートルほどの陶像が常滑に根付いた陶彫の技法によって製作されたのであった。陶像は現在、常滑西小学校西側の高台にあり、1968年（昭和43）には常滑市有形文化財に指定された。

鯉江方寿の土管の木型（常滑西小学校蔵）　　写真：石田正治

方寿が改良した諸技術そのものは現役ではない。土管製造については方寿没後の明治30年代後半から大正時代にかけて土管形成機が開発・普及していった。連房式登窯についても、より効率の良い石炭焚きの両面焚倒焔式角窯（常滑式石炭窯）が普及していくことになった。登窯は次第に姿を消し、現在では1887（明治20）年頃築窯の「陶栄窯（とうえいがま）」を残すのみとなった。この窯は1974（昭和49）年に操業を終え、1982（昭和57）年に国の重要有形民俗文化財となった。ちなみに石炭焚きの両面焚倒焔式角窯が常滑ではじめて築かれたのは、方寿が没した1901（明治34）年のことであった。まさに鯉江方寿は常滑の窯業発展の礎となったのである。

（天野卓哉）